

◆ 今週のコメント

- ・ アメーバ赤痢の報告が1例あり、累積報告数は18例です。累積報告数の内訳は、性別では、男15例、女3例、病型別では、腸管アメーバ症14例、腸管外アメーバ症2例、腸管及び腸管外アメーバ症2例、推定感染地域では、国内15例、国外3例、推定感染経路では、性的接触11例、その他7例です。
- ・ 感染性胃腸炎の定点当たり報告数は10.17で、過去5年間平均値(13.6)を下回っていますが、第43週以降増加傾向を示し、今シーズンで最も多くなっています。
- ・ RSウイルス感染症の定点当たり報告数は0.29で、過去4年間平均値(0.17)を上回っており、第33週以降多い状態が続いています。また、全国(1.05)では、本年中で最も多くなっています。

◆ 今週のトピックス: <インフルエンザ>

- ・ インフルエンザの定点当たり報告数は1.85で、先週の0.84から急増し、インフルエンザの流行開始レベルの定点当たり報告数1.0を超えました。
詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数報告の感染症

- ・ 五類: アメーバ赤痢(腸管アメーバ症) 1例【1月以降の累積報告数 18例】

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ	インフルエンザ	1.85	126
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	10.17	417
	② 水痘	0.95	39
	③ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.80	33
	④ 手足口病	0.39	16
	⑤ 突発性発しん	0.37	15
眼科	流行性角結膜炎	0.20	2

病原体情報

(検体名は、紙面の都合上、咽頭ぬぐい液をNP、糞便をFC、髄液をSF、尿をURと略す。)

検出病原体(報告数)	臨床診断名(採取週)	検体名	検出病原体(報告数)	臨床診断名(採取週)	検体名
アデノウイルス1型(1)	熱性けいれん(第40週)	FC, NP	マイコプラズマ・ニューモニエ(2)	かぜ症候群(第44週) かぜ症候群(第39週)	NP NP
コクサッキーウイルスA2型(1)	かぜ症候群(第39週)	NP	肺炎球菌(7)	かぜ症候群(第44週)×2 かぜ症候群(第43週)×4 かぜ症候群(第33週)	NP NP NP
コクサッキーウイルスA6型(1)	かぜ症候群(第41週)	NP	インフルエンザ菌b型以外(6)	かぜ症候群(第45週) かぜ症候群(第43週)×4 熱性けいれん(第40週)	NP NP NP
コクサッキーウイルスB5型(1)	不明熱(第39週)	NP	インフルエンザ菌b型(1)	かぜ症候群(第43週)	NP
エコーウイルス3型(2)	無菌性髄膜炎(第41週) かぜ症候群(第40週)	SF NP	サルモネラO4(1)	感染性胃腸炎(第46週)	FC
エコーウイルス9型(1)	かぜ症候群(第33週)	NP	黄色ブドウ球菌III型(4)	かぜ症候群(第44週)×2 RSウイルス感染症(第44週) 不明(第41週)	NP NP FC, NP
ポリオウイルス3型(1)	かぜ症候群(第38週)	FC	黄色ブドウ球菌II型(2)	かぜ症候群(第43週) かぜ症候群(第33週)	NP NP
A群溶血性レンサ球菌(1)	かぜ症候群(第44週)	NP	黄色ブドウ球菌 Not type(1)	かぜ症候群(第44週)	NP

【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <インフルエンザ>

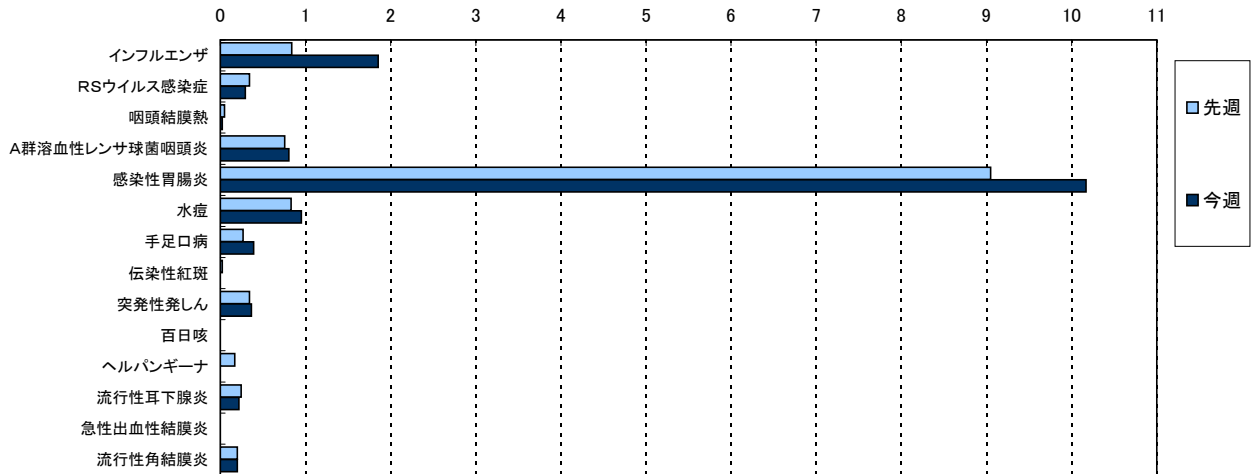
(注) 京都市のデータは、平成20年12月18日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。

また、本情報での患者数は、届出医療機関所在の保健所での集計で、患者の住所を示すものではありません。

病原体情報は、病原体定点等から京都市衛生公害研究所へ搬入された検体から検出された病原体です。

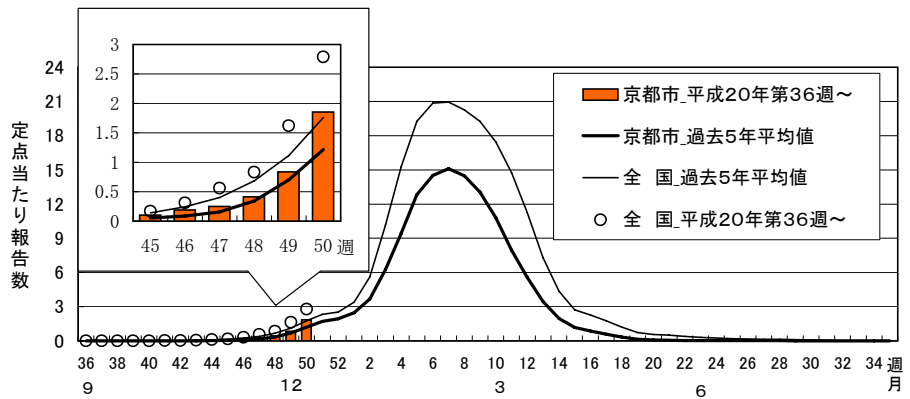
◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第50週)と先週(第49週)の定点当たり報告数の比較



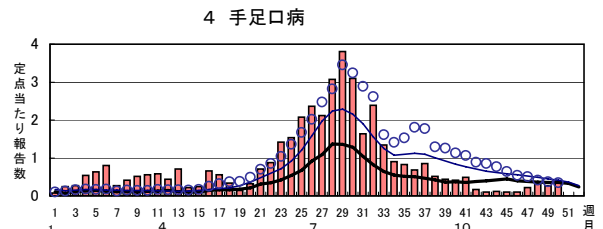
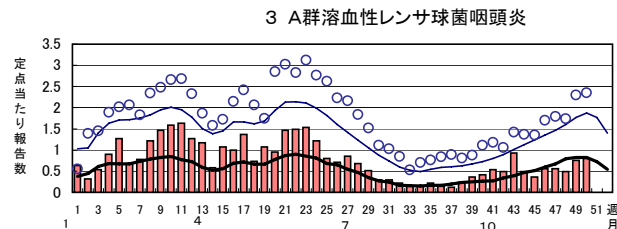
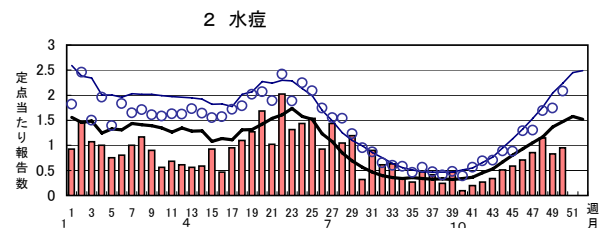
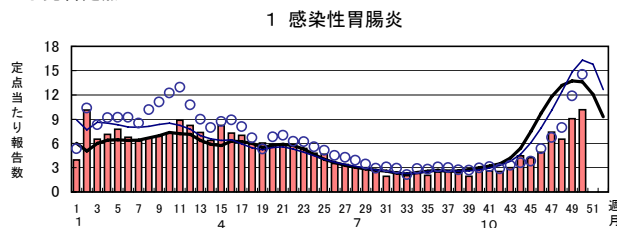
2 インフルエンザの推移

週	報告数(例)
第46週	13
第47週	17
第48週	28
第49週	57
第50週	126
累積報告数 (第36週以降)	253

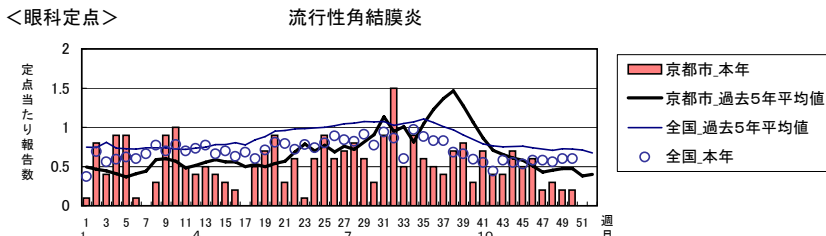


3 主な感染症(小児科)の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



今週(第50週)のトピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は1.85で、先週の0.84から急増し、インフルエンザの流行開始レベルの定点当たり報告数1.0を超えました。京都市における過去数年の感染症発生動向調査の疫学調査では、京都市全体の定点当たり報告数が1.0を超えた後、すべての行政区で、約8週間後に流行のピークが見られています。

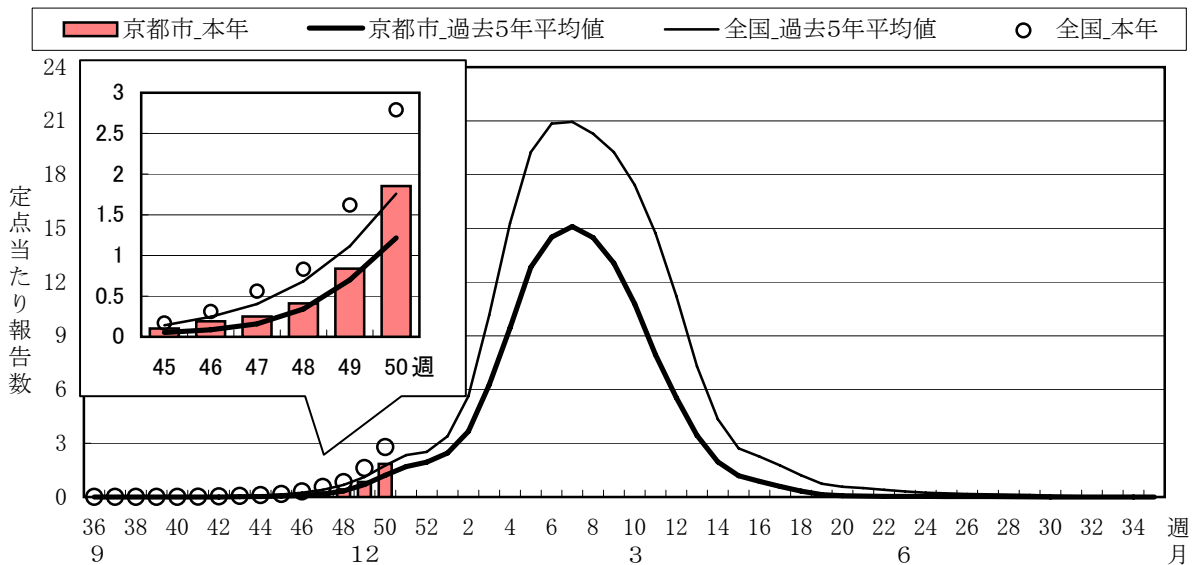
定点当たり報告数の多少がそのまま行政区での発生の大きさを表しているわけではありませんが、行政区別にみると、先週から増加しているのは、11行政区中8行政区です。

年齢階級別割合をみると、5～9歳が26.2%と最も多く、次いで0～4歳が16.7%、20歳代及び30歳代が14.3%となっています。

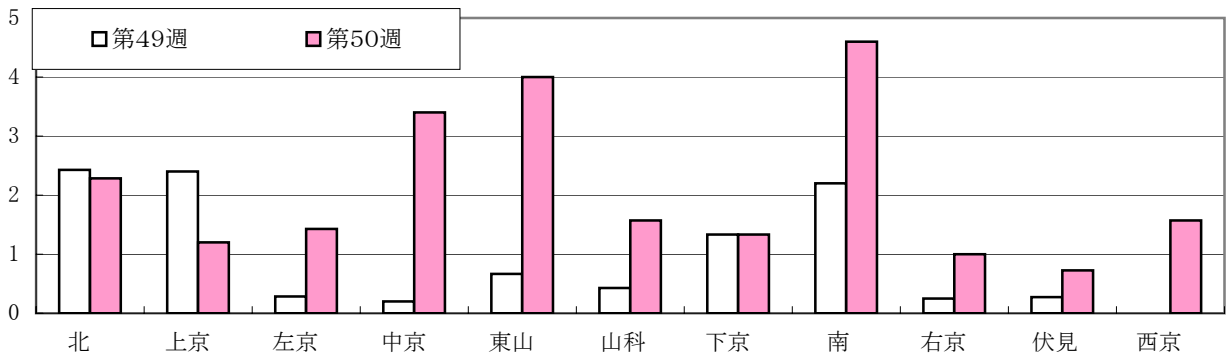
また、全国、近畿6府県でもすべて1.0を超し、流行期に入っています。

今シーズンのインフルエンザウイルスは、本市では、B型が1例報告されており、全国では、12月11日現在、A(H1N1)型37例、A(H3N2)型91例、B型47例となっています。

本市及び全国の定点当たり報告数の推移(平成20年36週～)



行政区別の定点当たり報告数の推移



年齢階級別割合

